

妖怪談義

川崎ゆきお

妖怪博士宅の狭い庭に冬の雨が降っている。小梅はすでに満開を終え、白っぽく散りかけ、雨で幹が真っ黒く輝いている。

「雨ですねえ。雪じゃないから、今日は暖かいはずなんですが、肌寒いです」と、妖怪博士付きの編集者がいつものように訪ねて来ている。

「一雨ごとに暖かくなる」

「はい」

「春の高校野球の決戦の頃になると、もう冬は去る」

「ああ、そうですねえ」

「私は小梅を見ているだけで、季節が分かる。これは気候のカレンダーでな、少し鈍いが」

「天気が分かりますか」

「そこまでは分からん。空を見れば分かる。梅など見なくても雨が降っておる」

「寒い頃でもこの梅、咲いていましたねえ」

「気温だけで決まるわけではなさそう。咲く時期はな」

「そんな話より、今日は妖怪の発生について話してください」

「以前にも語ったんじゃないのかな」

「忘れまして」

「録音していたはずだが、あれはどうした」

「ああ、あれは消えました」

「そうか」

「また、お願いします」

「これは妖怪学の基礎なので、地味な話になる」

「はい」

「おかしなもの、変わったものが始まりじゃ」

「妙な形とかですね」

「顔かたちなどが分かりやすい」

「そこから妖怪へ、どう変化するのですか」

「人の顔などはよほど変わっていても、それ以上変化などせん。しかし、それをさらに誇張させ、もう人の顔を超えたところまで変えれば妖怪になる」

「自然に変わるわけじゃないのでしょ」

「そう、人が想像で変えるのじゃ」

「だから、そこから先は嘘になるわけですね」

「そして、その人が妖怪になるわけじゃない。ヒントを与えただけじゃ」

「想像の翼に貢献する顔だったのですね」

「一番、妖怪にされやすいのは狐と狸じゃ」

「はい」

「狐顔と狸顔を意識しながら、道行く人を眺めてみなさい。どちらかに分類される。しかし、その人達は狐狸ではない。人間だ。だが、狸をそこに見るし、狐をそこに見る。いくら狐に似ているとしても、本物の狐と比べれば、あまり似ておらん。当然じゃな、人と狐は違うし、土台が違う」

「はい、眠くなりました」

「基本、基礎は眠い」

「はい」

「そこで第三のものが必要になる。狐と人間とでは飛びすぎておるので、その中間の形をな」

「はい。その第三の形とは」

「その形を形而上学という」

「先生、飛びすぎです」

「君は寝ておったんじゃないのか」

「聞いておりますよ」

「それを狸寝入りという」

「はい」

「想像上でしか存在しないもの、これを形而上学での物ということじゃ。だから、狐のような奴とは、そこじゃ」

「じゃ、形はないのですね」

「狐狸の場合、形を与える必要はない」

「僕が想像しているのは、異様な形をした妖怪です。あれの原型は動物でしょ」

「現実にあるものが変形したものじゃが、それでは奥行きがない。ただの見世物じゃないか」

「珍獣のような」

「そうではなく、心根のようなもの、精神的なものが妖怪としては良種じゃ」

「そのトップが狐狸ですか」

「これは万能性がある。顔かたちではなく、心の形を言っておる」

「今ので、眠り爆弾が炸裂しました。それにこの雨は眠気を誘います」

「物心というのがある」

「先生、またややこしいことを」

「物心がついた頃、とか言うだろ」

「言います」

「この、物が曲者なんじゃ」

「あ、はい」

「人は物ではなく、者じゃろ」

「ああ、漢字で書くとそうなりますが、物体の物でもいいんじゃないですか」

「者は特定の人、物はそれらの者。どちらでもいいとしても、物心というのが、どうも怪しい」

「物に心などありませんからねえ」

「物体の物にはな。しかしあると想像しての話が形而上学なのだ。赤ん坊の肉体。脳みそも含めての物じゃ」

「先生、その話はもうやめましょう。要するに妖怪の発生も物が先か心が先かの話なんですね」

「唯物論と唯心論のようなもの」

「もう寝ます」

編集者は本当に眠り始めた。そこはホームゴタツの中なので、風邪を引くことはないだろう。

妖怪博士は無理に話をややこしくしたようだ。妖怪の発生など、彼にもよく分からないので、思い付いた言葉を並べて、煙に巻いたのだろう。この録音ファイルはきっと消されるだろう。

そんなこととは関わりなく、冬の雨は降り続けている。

了